

# NIPPON FOOD SHIFT

## 「おいしい」の、その前に。 これからの「食」を どう考え、何をするべきか？ 生産者 × 農林水産省

おいしいものが当たり前のように手に入り、豊かな食を享受できる今の日本。その当たり前は、今後必ずと続いていくのでしょうか。気候変動、世界情勢の変化など地球規模のものから、少子高齢化など国内問題まで、日本の「食」の裏側には解決すべき様々な課題があります。これからの「食」はどうあるべきか、そのために何をすべきか。「食料・農業・農村基本法」の見直しに向けた議論の環として、3日連続この紙面上で消費者、事業者、生産者の方々と農林水産省の若手職員有志による「チーム2050」の座談会を展開します。思いや意見を交わしながら、20年後、30年後の日本の「食」を考え、あるべき姿を追求します。

### 食を支えるのは 生産者だけではない

まずはみなさんと農業の関わりについて聞かせてください。

**飯野** 埼玉県川越市でカブ、サトイモ、ニンジン、それに川越名産のサツマイモを作っています。5年前に全国農協青年組織協議会の会長を務め、日本の農業をどのように持続可能なものにしていくかを仲間たちと熱心に議論し、この問題の解決が私のライフワークにもなっています。

**佐藤** 学生時代に中越地震復興支援のボランティアとして新潟の十日町市に入り、それが縁でこの地で就農しました。「里山農業を心動く世界に」をモットーに新しい形の生産組合を作つて、サツマイモを栽培から加工・販売までしています。同時に、農村女性の自立支援にも取り組んでいます。

**窪田** 鹿児島農業大学校で知り合った夫と一緒に、霧島市で黒毛和牛の繁殖と肥育を営んでいます。鹿児島黒牛の魅力発信、消費拡大のために畜産を営む女性たちのコミュニティ活動にも関わっています。近年はトウモロコシなどの飼料が倍近く値上がりして、経営は厳しいですが頑張っています。

——日本は食料輸入大国。全てを国産でまかなうのは現実的でない中、今後、国産農畜産物をどのようにしていきたいですか。



飯野 芳彦氏

**飯野** 食料自給率ということですが、例えば大豆は93%を輸入に頼っています。味噌や醤油の原材料としてだけでなく、輸入大豆のほとんどが食用油として、多くの食品やお菓子に使用されています。もし、輸入が途絶えれば多くの食品がスーパーの棚から消えることになります。

もちろん現在はスーパーやレストランに行けばおいしいものが食べられますし、たとえ大災害があつて流通が止まっても3日と経たずにスーパーに食品が並びます。この素晴らしいシステムを今後維持していくためにはどうしたらいいのか。我々農業者だけでなく、消費者の方々、また事業者の方々も含めて一緒に考えていかなければと思います。

**窪田** 国産牛は輸入牛に比べて高いといわれますが、外国産や輸入牛でも飼養期間の半分より長く国内で飼養すれば国産牛と呼ばれます。これは消費者にはあまり知られていないことです。国産牛のなかでも私が生産している黒毛和牛は高級品。なぜ高いかというと、お肉になるまで3年もかかるからです。そうした農業の現実を知ってほしくて、私たちのチー

ムは地元の子どもたちを集めて話をしています。消費者とのダイレクトな接点、率直なコミュニケーションの場はこれからも増やしていきたいです。

**後継者を育成する「航海図」が必要**  
——農業の後継者不足も深刻。自営農業者は年間5万人ずつ減少している中で新規就農者を確保するためには？

**佐藤** 農業はこれまで家族経営が中心。一般企業のように上司が部下を育てる経験がなく、学びの機会や自己成長の機会も限られていました。さらに農産物の販売を外部に任せてしまつと、経営者というよりただモノを作るだけの労働者という意識に。後継者育成には、その子は何者として、どうやってどこに向かうのか「航海図」を作る機会が必要。その上で、経営を数字で語り、かつ厳しい自然環境の農業に「楽しい」現場とチームを作る力を身につけることが鍵。私たちもその一歩として農家の女性と経営ゼミを重ねています。



ウーマンファーマーズジャパン 代表取締役 佐藤 可奈子氏

**飯野** 農業が社会的にきちんと認められるためには、経営者感覚をもつた農業者が増えることが欠かせない。

## ニッポンの食 NEXT 座談会 ③

聞きたい  
話したい  
話し合いたい

農業法人化も一つの道ですが、私は小規模個人事業主ですが、外国産や輸入牛でも飼養期間の半分より長く国内で飼養すれば国産牛と呼ばれます。これは消費者にはあまり知られていないことです。国産牛のなかでも私が生産している黒毛和牛は高級品。なぜ高いかというと、お肉になるまで3年もかかるからです。そうした農業の現実を知ってほしくて、私たちのチー

域に根ざしながら暮らしていくことが重要で。

**横山** 労働力をいかに確保していくかは農水省にとっても重要な課題です。人口全体が減少している中で、単に農業は人が足りないから人が欲しいといっても、それだけでは他産業との競争に打ち勝つのは難しい。知恵を絞る、それぞれの人に応じた労働環境やワークスタイルを整備していく



水産庁 増殖推進部 栽培養殖課 課長補佐 横山 健太郎

必要があります。一口に農業者といっても、農作業そのものをする人なのか、ブレンとして企画・戦略や販路開拓を担う人なのか、あるいは農業の業務改善に取り組む人なのか、様々な働き方があると思います。必ずしも農村に住まなくて都会でリモートでつながりながら経営に関わることで可能かもしれません。

一方、若者だけでなく、多様なキャリアやスキルをもつ高齢者にも目を向けるべきです。当然、元氣な女性もターゲットでしょう。日本の農業が発展していくためには何が足りないのか、こんな経験やスキルをもつ人が欲しいと具体的にアピールしていけば、農村に限らず都会にいる人も含めて、若い人たちだけでなく上の世代も含め、様々な人材リソースを活用しているのではないかと思います。

### 本質への共通理解 求められるICT化

——サステナブルな農業経営のために、農業者はどう意識改革をすべきか、また消費者に求めたいことは？

**飯野** 日本のスーパーでは、海外では考えられないくらいハイテクオリエーティな農産物が格安で売られています。農家はそのためかなりのコストと手間を負担している。本音で言えばもっと高く買ってほしいけれど、私も消費者の一人なので、値上げは心苦しい。ただ、今後の農業の持続可能性を考えた時、消費者と生産者の歩み寄り

は必至だと思います。例えば私が生産しているカブの場合、目立たない収穫の時にいた傷などがあつたと見た目だけの問題で秀品から等級を下げ、2割程度安く取り引きされます。この商品を秀品扱いにしていたければ私たちの手取りも増えます。もちろん虫食いや病気のものは論外です。また、新規就農者も、手取りが増えれば定着率が上がる可能性があり、

それが持続可能性につながると思います。

**佐藤** 農産物は毎年同じ品質のもの、同じクオリティーのものができるとは限りません。どうしても品質にゆらぎが出るし、それが価格にも反映されてしまいます。けれども、このゆらぎがあるということこそ、消費者と共に育ってきた理想。例えばワインの世界には毎年の葡萄の出来のの違いを楽しむ文化があります。ゆらぎを受け止めて、農業現場への想像力をもてるようになれば、それ自体を楽しむことができるし、私たち生産者の未来もまだまだ明るいと思います。

**窪田** サステナブルな農業経営のためには、なんらかのICT化は必須。私の畜舎でもICTツールの活用して、牛の個体管理や発情の早期発見などを行っています。AIカメラで牛の羊水の状態を把握することで、分娩事故も少なくなります。これらを牧場の誰もがスマートフォンで管理できる。そうすることで、私たちの労働負担もすいぶん軽減されるようになります。



窪田 加奈子氏

**早瀬** 本日お三方のお話を聞いて、改めて食、農業の本質的な部分に触れることができて思いを新たにしました。今後の農業や食品産業を考えるには、生産者、消費者、流通事業者、研究者、行政など食に関わる全ての方が、こうした食・農業の本質的な理解を互いに深めていくことが重要であり、いづれかが欠けてもこれを担保することは困難だと感じました。また、ICTのお話から、こうしたブレイヤーの可能性を大きく広げるであろ「技術」の役割も今後重要になつてくると感じました。

食・農業に関わる全ての人の想いが、より良い社会を作り、社会を支える食品産業、農業が育まれます。将来における食の安定供給に向けて、様々な人と人との繋がりや、技術の社会実装を意識した取り組みを進めていきたいと思います。



農林水産省 経営局協同組織課 経済班 課長補佐 早瀬 健彦

**塩田** 国内では少子高齢化が進み、働く女性や高齢者が今より増え、

ライフスタイルの変化に合わせて食生活もさらに多様化、簡便化が要求されていきます。食品産業では加工技術も進化していきます。そうすると、今以上に質・量ともに多様な加工食品のニーズにあつた農畜産物が求められていく。一方、国外では食料の獲得競争が激化していくと考えられるので、ニーズの変化に国産でもしつかり対応していく必要があります。需要の変化に対応しながら採算性を確保できる農業を営むには、農業者の経営感覚を今以上に高めていく必要があります。今日お話を伺つたお三方のように、作る力、経営力、販売力を併せ持つ農業者やIAがもっと増えていくような環境づくりをしていきたい。そのためにはお話にあつた消費者と農業現場の橋渡しというのもその一つかなと思います。



農林水産省 畜産局 牛乳乳製品課 生乳班 畜産専門官 塩田 知恵子

**横山** 世間では農業は3Kのイメージがありますが、自然環境のゆらぎがある中でも、適切に判断しながら農作物を管理し、かつ労働力が減る中でも、なんとか経営努力を続けていくという意味で、実は強靱な超先進産業なのではないかと思っています。レストランで高級な和牛を楽しん



写真左から、羽生氏(ファンリテーター)、飯野氏、横山、佐藤氏、早瀬、窪田氏、塩田

### 食料・農業・農村基本法の 検証と見直しの検討

「食料・農業・農村基本法」は、様々な政策の方向性を定める指針となるものです。制定から20年を経て、農林水産省では、多くの皆さまからご意見を伺いながら、総合的な検証と見直しに向けた検討を進めています。

詳しくはこちら



### 農林水産省 「チーム2050」

将来の農林水産省の政策を担う若手職員の有志による「チーム2050」。今日的な社会課題や国内外の動向を踏まえ、未来(2050年)の農林水産業や施策のあり方について、「自分ごと」として検討に取り組んでいます。



チーム2050

食料・農業・農村基本法、検証中。

# 食から日本を考える。

農林水産省

広告